2012年
秋風号
第176号

飛鳥 かわら版
ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人　永野　正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話　088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp

「旅する本屋」

2012年８月18日㈯に沢田マンション（高知市薊野北町）で開催された「BOOK STOCK～旅するポポタム～」の様子。東京・目白の小さな本屋、ポポタムさんが来高、出店。

本との出会いも、一期一会。

毎年10月27日～11月９日は読書週間

第66回のテーマ

「ホントノキズナ」

印刷博物館探訪記…… 2
いろいろかいろ 八……安藝眞一 4
ブックレビュー…… 6
出版物紹介…… 7
文章力レベルアップ講座⑺……水木和香 7
ヒナタクサイ日記⑬……やまげんらう 8
キルギスタンからコンニチハ㊸……氏原名美 9
催し物掲示板…… 10
わが家の太郎㉓……永野雅子 12

飛鳥「かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

夏休み自由研究報告

印刷博物館探訪記

夏は人を開放的にする。
秋はそのひろくなった心身に様々な物事を吸収する季節。
９月は印刷月間。10月27日から11月９日は読書週間。
今こそ、わたしたちが輝く季節なのである‼

八月某日。その日は四日間ある夏期休暇の三日目でした。わたしはひとり東京にいました。今年の夏期休暇はすべて東京旅行に費やしてやろうと前々から決めこんでいたにもかかわらず、行った先で何をするのか、何処へ行くのか、さっぱり無計画のままこの大都会に乗り込んでいました。うーん。どうしたものか…

…と、その時思い出したのです。学生時代に見た一枚のチラシを。へーぇこんなおもしろい博物館があるのかぁ！　でも東京かぁ……。

その博物館の名前は「印刷博物館」。そして今、わたしは東京にいる！（つまり、「かわら版に掲載するために！」という高い志を持って行った訳ではないのです……実は。）

……　＋＋＋……

印刷博物館は、日本を代表する印刷会社、凸版印刷株式会社の小石川ビルの中にあります。ちょうどお昼休み時に行ったわたしは、社員の方に混じってビルの中へ。どきどきするなぁ！

まずは一階。受付のすぐ横にはＰ＆Ｐギャラリーといって、様々な企画展示を行っているスペースがあります。なんとこちらは観覧無料！わたしが訪れた時は「グラフィックトライアル2012」の開催期間中でした。この「グラフィックトライアル」とは、様々な分野の第一線で活躍するクリエーターが凸版印刷のプリンティングディレクターと共に印刷実験に挑み、「グラフィックデザイン」と「印刷表現」の関係を深く追求し新しい表現を獲得するための試みとして、二〇〇六年から毎年開催されているものだそうです。今年のテーマは「おいしい印刷」。一組と三名のクリエーターがこのテーマに添ってグラフィック表現の新たな可能性を探っています。

わたしが特に興味を持ったのは、三星安澄氏による「モアレのひかりもの」。これは印刷トラブルのひとつである「モアレ」の発生条件を探求し、その結果を元に、あえて「モアレ」を作り出し、デザインしているものでした。たしかに見る角度によって色を変える様は魚の鱗のようにも見えます。網点の大きさや形、間隔、重ねる色の種類や数、またそれぞれの色をどれだけずらすか、傾けるか……それらの条件がある一点でぴたりと揃ったときに「美しいモアレ」が生まれる様子は、どこか神秘的で思わずうっとりしてしまいました。普段の印刷工程の中では「要らないもの」とされていること、無駄だと思っているものから想像を超えた発見があったり、おもしろいものが生まれたりすることもあるのです。

他の作品では、おいしい食べ物がもつ言葉にできないクセになる魅力、それらを引き出す「隠し味」と「仕上げ」といった見えない技を印刷の工程に取り入れることで、モチーフとなるチョコレートの個性をどこまで引き出せるか試みたもの。印刷でコラージュの質感を表現することを追求したもの。印刷による美しいグラデーションとＡＲ(拡張現実)を取り入れ、人間の五感に挑戦したもの。印刷って、ただ「インクを紙の上に刷る」ということだけじゃない、も

地下一階の広々とした展示スペース

っと創造的なものなのですね～。うーん、奥が深い。

そうしていると、夏休み体験教室のアナウンスが流れてきました。この日の体験内容は「マイノートをつくろう」。せっかく来たんだから…！と、わたしも夏休みの親子連れに混じって参加しました。内容は実に単純明快。大きな紙を四回折って、表紙と重ねてバチンとステープラーで留めて、三方を切る。ファッション雑誌などの様な中とじ本を作ろう、というもの。別の日程では「寒天をつかって印刷しよう」「ポップアップをつくろう」という体験もあったようで、それもやってみたかったなぁ！　子どもの知的好奇心をくすぐりながら、楽しく印刷や製本の仕組みを伝える体験内容はみごとです。

小学生に負けないくらい体験教室を満喫した後は、そのまま地下一階の総合展示へ。

総合展示では、文字文化・印刷技術の進化と人間の関わりをゆったりとテーマごとにまとめつつ、時代の流れに沿った展示がされていました。活版印刷のしくみや写真植字のしくみ、実際の作業の様子や使われていた機械など、おおよそ「刷る」「彫る」「文字」「本」などに関するありとあらゆるものが集結していました。

古くは洞窟や岩壁などに彫られた壁画や碑文からはじまり、現代の電子書籍まで。まったく別物のようだけれど、すべては人間の表現活動のひとつであって、媒体は違っても〝なにかを伝える（そのために表現する）〟というコミュニケーションであることに違いはないのだと感じました。

気が付けば、併設されている図書室とミュージアムショップも見て、なんと四時間も滞在していました。

誰もが必ず毎日触れているといっても過言じゃないほど身近で多様な「印刷」。しかし、どうやって出来ているのかなんて、気にかけることがない。この博物館は、「印刷」を分かり易く、多角的に、そして誰に対しても開かれた身近なものとして発信しているように思いました。だって、こんなに観覧料が安いなんて……そこに一番感動したというのはここだけの話。印刷に携わる者のひとりとして、こんなにも有意義な施設があることをとても嬉しく感じました。もっと近くだったら何度でも行けるのになぁ。お近くに行かれた際にはぜひ立ち寄ってみて下さい。

（上月ちあき／飛鳥出版室）

※「モアレ」…幾何学的に規則正しく分布する点または線を重ね合わせると、その間隔の疎密によってできる斑紋。網版の多色印刷の際などに生じやすい。

印刷博物館

◆所在地
東京都文京区水道一丁目三番三号
トッパン小石川ビル
電　話　〇三・五八四〇・二三〇〇
ＦＡＸ　〇三・五八四〇・一五六七

◆開館時間
10時～18時（入場17時30分まで）

◆休館日
毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始、展示替え期間

◆入場料
一　般　三〇〇円　大　高　二〇〇円
小　中　一〇〇円
（各種割引あり）

いろいろかいろ その八

夏の朝

安藝眞一

五台山・山頂のテレビ塔

心に懸かる難儀の日々が続いた頃があった。四十六年にもなる昔の事だが、今も鮮明な記憶の底から浮かんでくる。その年は、何もかも思うにまかせぬ連鎖で、底気味の悪い明け暮れに知人の誘いがあって、五台山の朝参りのグループに夫婦で参加する事になった。

払暁に聖天堂で経をあげ、本堂に詣でて太子堂、いくつかの野仏にも手を合わす。登って一言地蔵から子安地蔵を経て船岡堂までの小一時間の径。艱難たちどころに立ち消えてとはいかなくても、悩みの渕からかすかに離れた安息の岸に立つ思いもあった。或る日、連れの一人が「このごろ、この山に賽銭泥棒が出ゆうと！」というと「下から上って来て幾つかの箱を探ったらそれなりの金になるろうかねェ」と誰かが答えているのを聴いていた。

その翌朝。さわやかな風が木蔭を通り抜けて行く一言地蔵の石段に差しかかった時、先を行く妻が俄かに振り向き下の茂みを見据えて「あんたかネ⁉ 賽銭を盗りゆうがは！わりことしたらいかんぞネ！」と一喝。その気迫に振り返った私の眼の中に、異様な風体の男がヒタヒタヒタと駆け上がってくる。震える手で足元の岩を探る。それを振りかざして私が「こりゃあァ！」と威喝しても男はひるまず私の目の前に立ちはだかった。一瞬、手にした岩を投げつけようとすると途端に男は坂を廻って藪の中を逃げはじめた。騒ぎを聞きつけた朝参りの仲間がわらわらと集まって来る。男は裾の短い黒い雨合羽に、直径十センチ程の丸い風穴をいくつも開けていてそれがバサバサと音をたてて怪鳥のように草むらを遁走する。追走の私は側らの木の枝を二メートル程に折り、天に垂直に立てて走りに走った。山路をあえぎ登りテレビ塔の森に出る。そこは窪地になっていて、その眞中に昇る朝日の光を浴びた男が捩じくれた短い鉄棒を振りかざして立っている。そこへ助太刀の一人が飛び込んで来て、「やるか！」の合図に、喚声をあげて枝を振り降ろす。と、私の木太刀が弾みで味方の眉間に命中し、助っ人は悶絶する。そのエラーにひるんだ私の頭を雨合羽の男の鉄棒が痛打し、血飛沫が飛んだ。その色に逆上した私は男に組み付く。逆る血が男の顔に降りかかり、夏草の朝露が血溜りを溶かして濡れ重なる。身体がすべり合って転がりながら、ふと、私はこんな情景をどこかで見たような記憶があって、そうか！ 黒澤明の映画「野良犬」のラスト近くに同じシーンがあったという記憶に辿り着く。あの時の場面はここで、別荘から流れてくるピアノの旋律が、もつれる刑事と犯人の息遣いにカブった事だった。必死の力で暴れる雨合羽の動きに私は記憶から戻ったが、中々にフォール押さえ固めにならない。と追って来た仲間の一人が大声をあげて手拭を私に投げた。そうかボクシングの試合の終りの合図か。その手拭を男の両足に巻き付け白い布に血がボタボタ落ちて、気が立っているので中々縛れない。力まかせに締めて終ると、括りがキノボリになっていて、昔、祖母が〝キノボリは縁起が悪いぜよ〟と云っていたのを思い出し、又、解きほぐして「本結び」に仕上げた。途端に力が抜け朦朧とした意識の遠くで救急車のサイレンを聴いていた。

警察署の一室。包帯巻きの私の頭を見ながら刑事が尋ねる「…泥棒と思った男を初めて見たのはどの辺りですか？」私は「何か大き目の紙と鉛筆を貸して下さい」と答えると「えっ！ どうするが、これでええかえ」と紙を差し出してくれる。鉛筆握った私は得意顔で「……ここが本堂、ここが太子堂で……」と現場の地形を絵図仕立てで描き続け、雨合羽の男の動きは点線で私の追跡は実

線で描き、森も茂みも池も描き上げた。刑事は絵図を眺めて「あなたは追跡の時、何か手に武器の様なものを持っていましたか？」と訊く。私は「ハイ。走り乍ら山路の何かの木の枝を六尺程に折り取って、それを立てて追跡しました」「……どうしてそんな長いものを立てて追っかけたのですか」と刑事が訊き直す。「敵のものより長い方が有利ですし、第一、隠し砦の三船敏郎にそんなシーンがあって、カッコよくて、あの様に走ってみたいと……」と私が答えると刑事は「隠し砦とは何ですか？」「黒澤明の『隠し砦の三悪人』という映画の事です」と私。刑事は呆気にとられた顔で私を凝視しながら、手元の調書を取り出して「犯人の口述やけんど、読んでみて…」という。読み進めると、途中に「コノママ　デワ　アキサン　ニ　コロサレル　ト　オモヒ……」という件があって、私は少し笑った。続けて刑事が問う。「……で、長い枝持って、追いついて窪地に着くと。そしたら男が先にあなたに打ちかかって来たのですね」「いいえ」と私は即座に否定した。「立ちすくむ相手にまず私が枝を打ち降ろしました」刑事は私を睨んで、「こりゃイカン。おまんが傷害犯ぢゃいか！　ちょっと待ちよりよ。動きなよッ！」と立ち上がりざま鉛筆を絵図の上にポンと落とすとそれがコロコロと滑って机のはじからストンと床に落ちて転がって行くのを悄然と見ていた。

――夕刻、刑事が戻って来て「よかった」といいざま座り「犯人が自白した。昨日も一昨日も盗ったと。おまんはもう家に帰ってもええ」

街に、よさこい祭の練習音頭がひびいていた。巻き換えの診察の時、「よさこいに出んといかんのですがかまいませんか」と訊くと「まあ、包帯して踊るならかまんでしょう」と若い医師が答える。その年の私の会社チームは二五〇人の編成で私は先頭を踊ることになっていた。

本番。テレビ中継の日、血染めの頭を青い頭巾で隠して踊った。後から聞いた話だが、その画面が出た時、中継のアナウンサーが「……先頭の青い頭巾の踊り手は、先日、五台山で格闘して、負傷して……」と云ったそうである。私はそのテレビ画面を見ていないが、観衆の渦の中をいつもの私の格好が踊っていく場面が想像できた。刑務所にはテレビがあるのだろうか、と、ふと思った。あの雨合羽の男は、よさこい祭を見たのだろうかと、ぼんやり考えていた。

（あき　しんいち／高知市）

ふれあいコーナー

「おばあちゃんは女子大生」を出版した河渕さん近況

六十七歳で定時制高校入学、「おばあちゃんは女子大生」を二〇〇五年に飛鳥から出版した河渕日出子さん。現在は日野原重明先生の主催する「新老人の会」のメンバーとして相変わらず元気に活躍しています。

写真は昨年の四国支部フォーラムで、日野原先生とのツーショット。何歳になっても様々な物事に興味を持ち、積極的に挑戦する姿、見習いたいものです！

100歳の日野原先生と、82歳の河渕さん、二人でピース！

67歳にして高校数学ゼロからの挑戦。
その後さらに高知短大へ進学！
Ｂ６判　127頁　定価1,000円（税込）
発　行　飛鳥出版室

ブックレビュー

中高年に多い25の病気を見逃さないための 健康評価ハンドブック

森　惟明

普段、気にもとめないようなちょっとした体調不良。「めまい」「頭痛」「しびれ」…。「若いころなら翌日には治っていたのに…」「毎日忙しいし、このくらいならどうってことないでしょ」そうやって放っている症状、ありませんか？　それらは実は深刻な病気の予兆かもしれません。

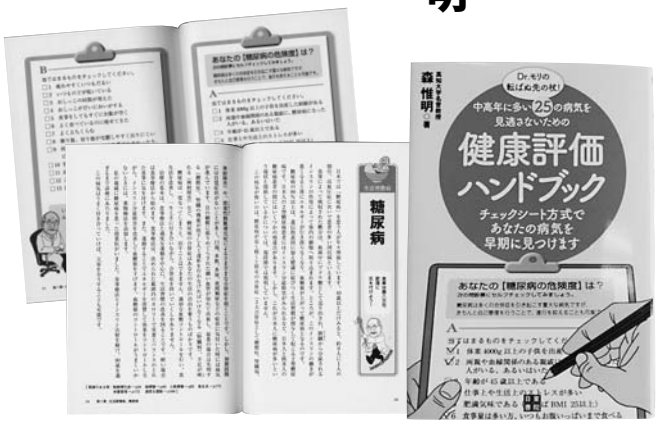
本著は、そんなちょっとした自覚症状をセルフチェック方式で分析し、中高年の人々が罹りやすい二十五の病気を読者自らが判断できる仕組みとなっています。

まずは序章で気になっている症状、心当たりのある症状をチェックしましょう。それらの症状から、可能性のある病気がどのような病気であるかを第一章で詳しく見ることができます。それぞれの病気は、専門的に詳しく説明されており、病気をしっかりと理解することができます。また、その後に用意されている問診票をセルフチェックすることで、その該当項目や数によってその病気の危険度が分かります。

一番重要なことは、自分の体の状態を正しく知っておくこと。そのためには病気についての正しい知識が必要です。病気を治療するのは医者ですが、発見し、診察を受けるかどうかの判断をするのは患者自身なのです。

日本は世界有数の長寿国。同じ長生きするならば、心身ともに健やかで穏やかに自立した暮らしがしたいものです。自らの身体の状態を知り、正しく判断し、日々の生活から見直し改善していく――。本著はその一連の流れをサポートしてくれる一冊となっています。

老いを迎える前の身体が発するシグナルを見落とさないために、あなたも〝転ばぬ先の杖〟用意しておきませんか？



四六判　一九一頁
発　行　日東書院
定　価　一、二〇〇円（税別）

森　惟明（もりこれあき）先生プロフィール

一九三四（昭和九）年四月十六日生まれ。大阪市北区出身。脳神経外科専門医。京都大学医学部卒、医学博士。米国ノースウエスタン大学に留学し世界最先端の小児神経外科学を修める。現在、高知大学名誉教授。

著書「健やかな第二の人生をめざして」「ボクの写真メモ」「ここが知りたいガンマナイフ治療Q&A」「脳神経外科―今日の話題―」　他　多数

寄贈図書紹介

●文字と社会、そのかけ橋として 森澤嘉昭とその時代

ありがとうございました。

読書の秋もいいけれど
食欲の秋も捨てがたい

出版物紹介

詩集 人生の扉は一つじゃない

大﨑　博澄

元高知県教育長で、現在は民間の教育相談施設を主宰している大﨑さんによる詩集。高知新聞教育欄に連載されていたものを中心に、「小さな哲学」のつまった五十編の詩がまとめられています。ご自身も様々な苦難を経験し、そこから多くの出会いと幸せをつかみ取ってこられたからこそつむぎ出せるしなやかで芯のある詩は、子どもだけでなく、毎日に少し疲れてしまった大人の心にも静かに染み込んでいきます。

A5判　八四頁
発行　たんぽぽ研究所
頒価　一、〇〇〇円（税込）

一歩先へ！　文章力レベルアップ講座(7)

読点の入れ方（打ち方）のコツ

水木和香

句点（。）は文章の終わりに打ちますから、まず迷うことはないでしょう。しかし読点（、）は、書き手のセンスやスピード感などで入れますから、やたら多い人、ほとんど入れない人と、様々です。またひとつの文の中に複数入れる時などは、どこで入れるのが最適なのかと、迷うこともあります。

読点の目的は、区切ることで意味の取り違えを防ぎ、内容を掴みやすくすることです。接続詞や接続助詞の後に機械的に入れるだけでは個性が失われ、時には逆に煩わしくなったりもします。

以下を参考に、自分の文体を作り出しましょう。

〈例文〉

①意味の取り違えを防ぐために

・急いで去っていく、バスを追いかけた。

・急いで、去っていくバスを追いかけた。

※急いで去っていくバスなのか、急いで追いかけた（人）なのかを明らかにする。

②同じような役割の言葉が続く時

・懐かしく、ほろ苦い記憶。

・彼は飛び上がり、素早く身構え、殴りかかった。

③主語・述語・修飾語の順番が入れ変わったり、倒置になった時

・赤い花を、君に摘んであげよう。

・甘えてるんだよ、彼女は。

④ひらがなが続いて読みにくい時

・詳しく説明してもらいはしたものの、さっぱり分からなかった。

⑤独立語の後

・ああ、そういう事か。

・もしもし、どなたですか。

・さて、そろそろ出かけましょう。

⑥音読した時の効果を考える

・風鈴がチリリ、リーンと鳴った。

・下駄の音がカラン、コロンと響いた。

⑦主語が長い時、主語と述語との間が長い時

・大人になるまで海を見たことがなかった彼女には、船旅は酷だったかも。

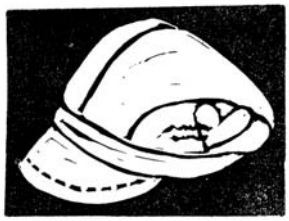
・彼と出会うまで、同じ顔の人がこの世にもう一人いるなんて、考えたこともなかった。

（みずき　わか／高知市）

ヒナタクサイ日記 その十三

おこづかい

by やまげんらう
（香南市在住）



ある日、台所で皿を洗っている背後から、娘みょみょこ（小六）が「お母さん、ダメかもしれんけどおねがいがある～」と声をかけてきた。はて、私はそんなに娘の希望に対していつもダメダメ言うておるのだろうか、ちょっとガーン…と思いつつ、同時に「ダメかもしれんお願い」って何やろ？　ワクワク…とも思いながら水道を止めて向き直った。するとみょみょこは、「おお、神よ」みたいなポーズで「おこづかいがほしいです」と言った。

みょみょこは最近、思春期に片足を突っ込んでいる。今までの、家族思いの優しさプラス、親へのダメ出しと頑固さが少々。それから、友達とのつきあいが増えて、週末にはお気に入りの帽子をかぶって自転車で出かけたまま、夕方まで帰らないなんてことが多くなってきた。ちなみに、思春期少女たちの社交場は、おしゃれなカフェやファストフード店ではなくて、町内の駄菓子屋か漫画が置いてある古本屋である。

これまで小遣いは、必要な場面で無駄遣いにならない程度に渡してきた。みょみょこの友達の家もそうだった。だが、最近はみな月々定額の小遣いをもらうことになりつつあるという。お金の管理は自立への第一歩なのかもしれない。財布と相談しながら買い物をするのは勉強になるし、なんといってもクールだ。あまり高額だったら考えものだが、「月にいくらっていう希望はある？」と、みょみょこにたずねると、みょみょこは元気よく「千円！」と答えた。思わぬ安価に、膝がカクっとなった。どうやら、友達の小遣いもだいたい千円から千五百円までが多いらしいのだが、その金額は昭和五十年代に小学生だった私のときと変わらない。本当にそれで足りるのかと思ったが、亭主・英魚も「本人がそれでいいっていうんだから、いいんじゃない？」と言うので、月のはじめに千円のおこづかい。約束として「金額の大きな買い物をするときは、お母さんに相談すること」「お金の貸し借りや、あげたりもらったりを友達や姉弟でやらないこと」が決まった。

数日後、はじめての小遣いを手にしたみょみょこは、欲しかった漫画を買うため古本屋に行った。一冊百五円。四十巻シリーズを何冊買うか。財布の中にあった小銭も合わせれば十冊買えるが、それではスカンピンになってしまう。悩んだ末、二冊に決めたみょみょこは、「千円って多いようで、すぐになくなる金額やね」と苦笑い。さっそくいい勉強をしたようだ。

ところが次の月の小遣を渡した数日後のこと。農作業を終えて、昼食を作ろうと作業場から台所に向かう途中、友達と一緒にいるみょみょこが、弟みーたに「お金を財布からもらうでぇ」と言っているのが聞こえた。こらこら、約束が違うではないか。私は直ちに二人のいる部屋に乗り込み、「イカンやんか！」と怒った。二人は飛び上がるほど驚いて、みーたはゲーム機をつかんで逃げ、逃げ遅れたみょみょこは「ちがう」と言い訳をしようとするので「なにがちがう！」とさらに怒った。すると、みょみょこは下を向き、早足で友達と出て行った。なんとも苦い気分だ。やはり小遣いが足りないのか。弟から金を巻き上げて、駄菓子でも買うつもりだったのか。帰ってきたら、なんと言って聞かせよう。

考えがまとまらないうちに、みょみょこは帰ってきた。そして私の前まで来ると、レジ袋を差し出した。袋の中には、百円均一の店で買ったらしいクリアファイルと髪留めとサンバイザー。顔を上げるとみょみょこが「おかあさん、お誕生日おめでとう」と言った。さっきの会話は、これを買うための相談だったのか。私は泣きそうなのを必死に隠して礼を言い、誤解を詫びた。どこからともなく、みーたもピョコンと出てきた。

キルギスタンからコンニチハ ㊸

あいさつ考

氏原名美

うじはら　なみ
高岡郡越知町生まれ／北大でロシア語を学ぶ／2001年からキルギス在／国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長）

九月、入学の季節。小学一年生は服装ですぐに分かる。男の子は黒いスーツ姿、女の子は白ブラウスに黒のジャンパースカート、頭に白い大きなリボンだ。ここでも、「元気な声であいさつしましょうね」と学校で教えられるのだろうか。

大学生は、何年生なのか服装で判断できるわけではない。日本より小中高の学習年数が短いため、せいぜい十六か十七の一年生は、顔立ちの幼さから何となく想像するだけだ。日本語の授業が始まると、毎年のことだが、すぐに「ズドラーストヴィチェ」は日本語でどう言いますか、と聞いてくる。「お元気ですか」くらいの意味のロシア語で、出会ったときに交わす普通のあいさつだ。うっかり、「こんにちは」ですよ、などと答えてはならない。

互いの関係を良好に保つというあいさつの目的はどの言語でも同じだ。しかし、あいさつの「作法」は文化や習慣に属しているから、立場によってどちらが先に声をかけるか、どのような表現を用いるか、あるいはまったく声に出してことばを発しないか、身ぶりは…など社会によって大きな差がある。

「あいさつ」はモノの名前と異なり、シールを貼りかえるように言いかえることができないものだ。もちろん、指し示す意味の範囲が異言語間でまったく同じということはあり得ないから、モノの名前でも油断できないのだが、何より、目に見えないきまりは、よそのことばを学ぶ者にとってまことに厄介な代物で、あいさつはその代表格と言える。ルールを知るには暮らしの中で体験するしかない。

出会いのあいさつを「こんにちは」と教えたら最後、朝から晩まで、教室であろうが廊下であろうが、その日のうちに何度会ってもお構いなしに、杓子定規な「こんにちは」を聞かされることになる。他人行儀の「こんにちは」は勉強の場にはそぐわない。子供の「こんにちは」は愛らしい。しかし、不特定多数が相手のテレビであるまいし、いい大人が毎日顔を合わせる人に、まして上司や得意先の人に対して「こんにちは」とは言うまい。

オウム返しにことばを覚えるより、にっこり会釈のほうがはるかに難しい。うちの大学では学生に、教室では教師が「始めましょう」と言ったら「お願いします」、「これで終わります」と言ったら「ありがとうございました」と言うように、また廊下やバス停で先生を見かけたら「○○先生！」と声をかけて目があったらにっこりしてください、知り合いの日本人には何も言わずお辞儀をするだけでいいですよと、ジェスチャーを交えて教えることにしている。ことばは表情やしぐさと調和して初めて自然に口を出るものだ。

用事があって日本センターに出向いた。受付横の椅子に座っていたら、通りかかった若い日本人スタッフに「こんにちは」と声を掛けられた。よく知っている間柄なのだが、いつもそうだ。「あら、いらっしゃい」でも「お久しぶり」でもない。「お邪魔してます」と頭を下げながら、時代は変わるものだなと思う。

大学入り口で警備員たちがにらみをきかしている。だれかに教わったらしく、朝会うと「コンチワァ」、帰りには「サヨナーラ」と言ってくれる。ぶっきらぼうでいかめしい表情なのに、まことに気持ちよく響く。こちらもうれしくなるから不思議だ。

催し物案内板

H24　H25
10月～1月

書道展

第2回　岡野寿美書展
―友に感謝　今を生きる―
期間　11月2日(金)～11月7日(水)
10時～17時（最終日は16時まで）
会場　高新画廊

第30回　硯田社書展
期間　11月23日(金)～11月28日(水)
会場　高新画廊

追慕・福原云外書展
期間　11月27日(火)～12月2日(日)
9時～17時(入館は16時30分まで)
会場　高知県立美術館県民ギャラリー

第1回　県展書道無鑑査展
期間　1月4日(金)～1月10日(木)
会場　高新画廊

作品展

女子美術大学同窓会
第2回　高知支部作品展
期間　10月31日(水)～11月4日(日)
10時～18時(最終日は17時まで)
会場　ギャラリーCOMOサロン
（マルニ高知店2F）

絵画展

第70回　野並允温個展
―平家の里風景画とヒマラヤの山―
期間　開催中～11月23日(金・祝)
9時～17時(入館は16時30分まで)
※毎週月曜休館(祝日の場合はその翌日)
会場　越知町立横倉山自然の森博物館
料金　大人500円　高・大400円
小・中200円

絵金生誕200年記念　絵金とその時代展
期間　11月10日(土)～12月16日(日)
9時～17時(入館は16時30分まで)
※毎週月曜休館(祝日の場合はその翌日)
会場　香美市立美術館
料金　一般　500円
(20名以上団体料金　250円)
長寿手帳提示　250円
身体障害者手帳提示　無料
高校生以下　無料

華道展

第66回　秋季いけばな県展
期間　10月26日(金)～10月28日(日)
10時～18時(最終日は16時まで)
会場　高知市文化プラザかるぽーと7F

「みんなに知って欲しい！」という催し物や展覧会、講座などはありませんか？　飛鳥ではお手伝いさせて頂いたイベント等をこの「飛鳥かわら版」上でお知らせします。
ポスター・チラシ・パンフレット・ダイレクトメールなどなど……あなたの情報発信を飛鳥は全力でお手伝いいたします。お気軽にご相談下さい。

高知県立坂本龍馬記念館
シェイクハンド龍馬像お披露目１周年記念

Let's go! Hand-in-Hand

～龍馬でつながる、「志」でつながる～

昨年の十一月にお披露目したシェイクハンド龍馬像の一歳の誕生日を祝うイベントを開催します。タイトルの「Hand-in-Hand」は「手に手をとって、協力して」という意味。身分に関係なく同じ志を持つ者が協力することで平和で平等な国づくりを目指した龍馬の精神、そしてシェイクハンド龍馬像誕生の意味にもつながります。このイベントを通して、さらに多くの方にシェイクハンド龍馬像を知っていただき、龍馬の精神を発信していくことを目的としています。皆様ふるってご応募、ご参加下さい！

参加者大募集！

★イベント内容(一部)

11月15日(木)　※入館無料　※雨天決行
●シェイクハンド龍馬像写真コンテスト受賞作品発表
あなたとシェイクハンド龍馬像を一緒に撮影した写真を大募集！
●『竜馬がゆく』リレー朗読　当日参加もＯＫ！

11月18日(日)　※雨天決行
●みんなぁでシェイクハンドぜよ！
桂浜龍馬像からシェイクハンド龍馬像まで400人の握手でつながる！

【各種イベント参加申込・お問い合わせ】
〒781-0262　高知市浦戸城山830番地　高知県立坂本龍馬記念館
TEL　088-841-0001／E-mail　ryoma@ryoma-kinenkan.jp
主催：高知県立坂本龍馬記念館 ／ 協賛：リョーマの休日・「龍馬まつり」

あすかの社窓から

グリーンカーテン

今年もグリーンカーテンの季節がやってきました。といっても、今まで私は世話をした覚えもなく、「ゴーヤができたき、持って帰りなさい」と言われるだけでした。今年は多分、ベランダに一番近い席ということもあって、プランターに植えるところからさせていただきました。しかも今年はゴーヤとアサガオだけではなく、きゅうりも植えることに！　いろんな方のアドバイスをいただきながら、N内さんと世話をさせていただいて、いつのまにか『園芸部長?』を拝命！

最初はきゅうりがものすごい勢いで育って、ゴーヤがなかなか育たなかったけど、なんとか皆さんに食べていただけるぐらいまで育てることが出来たので、私的には初めてにしてはよかったと思っています。

（N本）

K原部長の提案で『デコキュウリ』も作ることに！

→『園芸部長』の力作

ビアガーデン

お酒大好きな街、高知。季節問わず、年中お酒の席は賑わうけれど、ビールの年間消費量ランキングで常に上位をゆく県であるからには夏はここへ行かなくちゃ！　そう、ビアガーデン！　高知の夏は長いから、梅雨明けが発表される前からホテルやレストランの店先は「ビア」を求める人で賑わう。

そして、その波は今年も飛鳥にやってきた。仕事はサクッと定時で切り上げる。現地集合でジョッキを受け取ったなら、乾杯の音頭も待たず皆好きずきに行動開始！（こういう時の女性のパワーはすごいと思う……）それでも最後には恒例のビンゴ大会で一同盛り上がり、社長からの「下半期もがんばろう！」の挨拶にて解散。こうして夏の一夜は更けてゆきました。

（K）

↑飛鳥のパワフル女性陣

↑恒例ビンゴ大会

←景品ゲットしてご満悦

雑書き

◆今年の夏は気が付けばエアコンも扇風機も使わないうちに終わっていました。究極の節電やん！と思われるかもしれませんが、単に究極のものぐさだっただけなのです。この作戦で冬も乗り切れたらなぁ！　なーんてね。　（上）

◆集金袋に入れる小銭を娘に借りた。後日、「二〇〇円、ありがとう」と返すと、「一五〇円やったけど」と言うので、一五〇円渡した。すると「正直に言ったのに…」と呟き、「金の斧～！」と叫びながら去っていった。「正直者には信用という名の金の斧がたまるがでぇ」と叫んでみた。　（しま）

◆なんと宝くじが当たった。お陰で心に余裕ができた。たいていのことは許せるし、友人に食事もご馳走するし、旅行にも行ける。仕事もなぜかすごく順調。不思議なことに体調も良くなる。やはりお金の力はすごい！　あぁ…これが夢でなかったら……　（かわ）

◆最近、ものすごく歯がゆい事は、すぐに名前が出てこない事だ。「〇〇に出ていた芸能人の名前は？」と聞かれて「あぁ、あのあの……」となる訳。くぅ～。　（なか）

印刷屋さんの「すったもんだ」

突然ですが、私「犬」が苦手です！正確に言うと苦手になりました。その原因となったのが、このかわら版でご好評いただいてますシリーズ「わが家の太郎」のその“太郎”なのです。

太郎が血気盛んな時期、無垢な気持ちで撫でる私にガップリと噛み付いてきたり、近づくだけで「ウゥ～」っと牙むき出しで敵意を示されたりという事を繰り返すうちに、私の脳には「犬＝噛み付く」というイメージがインストールされたようです。何度か克服しようとチャレンジしたのですが、恐怖心をあらわに近づくと犬もそれを感知し吠えてきます。そうなると「あ～やっぱりコワイ」という悪循環で今日にいたっております。絶対に大人しいとわかってるワンちゃんや、圧倒的な勝利が見込まれるワンちゃん（小型犬）に対しては全く問題なく接することができるんですがね～（苦笑）（永野正将）

わが家の太郎 ㉓

ストライキ、再び…

永野　雅子

今年の夏のお天気は不安定で、予定していた用事がちっとも出来ない。空を眺めては厚い雲を掻き分けたくなる日が多かった。

とくに朝夕の散歩の時間に篠突く雨が降ったりすると、

「太郎、今日の散歩はパスよ」となる。

そんな日が二日ほど続いたある日、帰りが遅くなる予定なのに、出かける時うっかり庭の電気をつけ忘れて、まっ暗い家に帰宅すると太郎が居ない。

出口の鍵は掛かっているし、隣家の塀に夫が張り巡らしたネットもいつも通り。

電池をかざしては「太郎、太郎」と呼んでも出てこない。家の中も庭もひっそりしている。

だんだん不安になってきて、

「お父さん、どうしよう。太郎が居ない。助けて！」

と言いながら、広くもない庭を必死で探す。ふと、奥にある倉庫の床下に電池を当てると、なんとそこでうずくまって上目遣いに私を見ているではないか。

「太郎ちゃん、どういうこと？　早う出ておいで」

「……。」

いくら呼んでも頑として動こうとしない。

そこはこの夏、私が蜂に刺されたので怖くて近づきたくない所。

仕方なく冷蔵庫から彼の好きなおやつを取り出してきてかざすけれど、

「フン！」という態度。

まったく、モウ！

「これ以上、ご機嫌はとれません」と引き上げると、やがてノコノコ出てきた。

仕事だ、会だとしょっちゅう留守にする主を、ただひたすら待つだけの彼にしてみれば、ストライキをしたくなるのはわかるけど、この一部始終にペットと言えども侮れないという気持ち。

そこへ東京から夏期休暇で息子が帰ってきた。

早速、川へ連れて行くことになって、

「太郎ちゃん、久しぶりに思い切り走れるね」と送り出した。

さぞや喜んで走り回っているだろうと思っていると、夕方帰ってきた孫が、

「おばあちゃん、太郎は車の下に入ったまま出て来んかったよ」

と言う。

「あらまあ、せっかく広いところに行ったのに…」

息子曰く、

「太郎も年寄りと暮らすと、年寄り向きになるがよ」

ですと。失礼な！

（ながの　まさこ／飛鳥常務取締役）

（高知では懐中電灯のことを「電池」というそうです！）